

企 圖

(フレibel)

此の文章はフレibelが幼稚園に關する企圖に就て、其の思想を述べた、或る新年初頭の冥想である。誕生百五十年の祝意の一端として特に譯し掲げて、讀者諸君と共に熟讀玩味したい。譯は文學士菊池武繼氏を煩はした。茲に其の勞を謝す。(編輯者)

除夜の鐘の響を耳にする時、人は刮目して來るべき年を待ちながらも、我が過ぎ來し方の果敢なき、此の一年の餘りにも、遑しかりしを漫ろに追懷是を久しうするもの、如くである。夫れは入り日の殘光の様に、過去一年間に起つた盡きせぬ追憶の數々が、今更の如く鮮かに甦つて人の目を見張らせる爲である。即ち人は逝く年を惜しむ名残りと、來るべき年への期待とに浸りながら、萬感交々到つて盡きざる有様で除夜の鐘の響に聞き惚れるのである。人は今將さに盡きんとする此の一年間に、遂行し或は等閑に附し、努め或は失ひ、成功し或は失敗し、彼に利益となり或は妨礙となつた一切の事どもをまさしくと想起する。人は達成された事と、彼の努力も希望も空しく失敗に終つた事とを仔細に吟味する。人は成就した事の効果と、等閑に附せられて居た事の結果とに就て穿鑿する。人は全く申し分なき意氣込を以て成就された場合の形式を篤と比較して、殆ど掌中に握りしかに見えながらも、みす／＼九仞の功を一簣に缺ける多くの場合の原因を追求する。過去一年間を通じて、逸早く行はれた努力と熱望とが妥當視さるゝ限り、其の努力なり熱望なりは今やより判然と人を發奮せしめる。そして來るべき年を垣間見ながら、人は新たな活動と實行との新芽を見出す様に、人の胸も心も新たな努力と新たな希望と新たな活氣とに湧き返つて居る。人は是

等の努力なり希望なり活氣なりが、最も確實に然も最も迅速に達成され得べき方法手段に關して探求する。そして凡ゆる方面から其の問題を考察した揚句、一つの最後期的思想に到達するが、是こそは一切の眞隨をなし、又人生が究極に於て與ふる處の所謂、人生の目的に對する正確なる認識と處置との根柢をなすものである。換言すれば此の思想こそは、生活の爲の人間教育が與へた體驗の賜物であつて、この思想に基いて、家庭教育、第一教育、人生の教育といふものが人に與へられるのである。一度、人の奥底に宿る心情とその個人的生活とを瞥見し、又教育が彼に何物を與へたかを瞥見したならば、一切は、自から無言にして然かも雄辯なる感情の中に氷解し、顯著ではないが然も明白なる思想の中に氷解するのである。寔に人の子に對して、この地上に於ける最初の産聲からして既にその存在の正しき認識と、適切なる哺育と取扱ひ、即ちその天賦の才をば眞に遺憾なきまでに各方面にその驥足を伸ばさしむるやうな教育と——要するに、所謂人生なるもの、正しき認識と處置とこそは、望まじきもの限りである。

然して、幼兒はその個性の底ひに根を張れる物を熱望し、是等の要求と連關して憧憬する物をば獲得せんものと、自發的に努力の一步を踏み出すことであらうが、此處に忘れてならないのは、彼は一箇の人間として、自分は孤立しても居なければ、亦孤立して居るべきでもないといふ一事である。換言すれば、一個の人間として、彼は常に家族、社會、國家並に現存する全人種の一員たるに留らず、尙ほ、ありと凡ゆる人類の一員であるといふ一事に逢着して、その事實を承認するに到るのである。即ち人は、一切の人々と共に一箇の有機的統一體であり、そして夫れを形成する。又、一切の人々は、彼と共に有機的統一體を形成し、しかも有機的統一體である。故に、有機的統一體の一員として、有機的統一體とのより自由にして、より精神的なる結合を保つて、初めて人は一個の人間として、獲得せんとして精進する處の物をば獲得するだらうし、又獲得することも可能であるだらう。單獨では、人は殆ど何事をもなし

得ないので、仍で結合しやうといふ考が彼の心を満たし、協力一致の精神が彼の魂に漲るに到るのである。實際、幾人かゞ、又は多くの人達が——さうだ全體の、或は尠くとも自分に最も近い人達でもが、各個人に對する場合にも、總ての人々に對する場合にも自分と一心同體になつて呉れるなら什麼に嬉しい事だらうか。今日も今日とて、逝く年を惜しみ來る年を待ち侘ぶる折柄、一切を擁護し、一切を包含する思想並に感情として、自分と共に考へ共に感ずる凡ゆる人々に對する次の様な訴への聲が人の胸底から迸り出る。

「いざ來よ友よ、幼な兒と共に生き長らへん。」

一切を結合し、一切を含有するこの訴へは、除夜の鐘の響を聞くに際しての吾人の總べての感情と思想とを言ひ得て餘蘊がない。吾人は實際、それが多くの——又、思慮綿密なる生活を送るならば其の總べての人のそこばくの鮮明な感情と、雄辯なる或は無言の思想である事を豫想し、希望し、そして信ずるものである。

故に逝く年の大晦日に於てすらも「いざ來よ、友よ、幼な兒と共に生き長らへん」とする決心と、この決心の具體化とは、多くの人々が精神的結合と共同の精進とを痛感せる慾望を示すものである。随つて、來るべき年は、其の第一日より否その最初の時間よりして、斯くの如く人類にとつて最も重大なる機會となり得るものであるが、その機會とは、即ち全人類の幸福のみならず、亦個人の幸福の爲にも結合すべき機會の謂である。斯くの如き協力一致の精進は、來るべき年をば眞實の意味に於ける「新しき一年とするであらう。

然しながら「いざ來よ友よ、幼な兒と共に生き長らへん。」といふ觀念が、逝く年と來る年との年の瀬に於てのみならず、如何なる時に於ても多くの人々の結合的にして基礎的なる不滅の思想であり、又その思想が人の胸底に一致と同情とを見出すのみならず人類の生活と行爲との中に確實に把握されてゐるといふ豫想を吾人の心中に目覺めしめ、

信念を懐かしめ、そして確心を與ふるものは、抑々何であらうか。

幼児時代を經過せざりし人がない以上、人がその修養時代に於て、此の不滅の思想を確保する事と確保せざる事に依つて、一身上に如何なる結果の相違を受けたかを認めない人は一人もないのである。それどころか、總べての人々は此の思想を終始一貫墨守する事に依つて、如何なる影響を受けたかを痛感して、實際屢々他人にも述懐してゐる程である。若し吾人が暫時なりとも此の思想の確固たる墨守に就て默思するならば、其の思想を實踐窮行する事により、其の思想が吾人の中に呼び起す我等の幼年時代の追憶により、其の思想が我々自身の生命に與ふる補足と完成とにより、又其の思想が我々自身の日進月歩の改善の爲になされ又は與ふる要求と機會とに依つて、初めて吾人は我々自身の最上の生活を送るものである一事を吾人は深く體得し、しかも判然と認識しなければならぬ。

此の叫びは、我々の唇を突いて迸り出づるものである。即ち此の叫びは、人の胸底に同情と一致とを見出さん事を求めて止まないものである。換言すれば一切を抱擁する眞情即ち慧眼なる洞察力は、凡ゆる物に於て、無言の感情として、沈黙の思想として、將た又世界の思想として、此の叫びを認識するのである。

人の眞情は、此の叫びが行爲の中に闡明し、又人が單なる一部分に過ぎず、しかも缺くべからざる一員である處の有機的統一體中の一事實として此の叫びが闡明するのを見逃がしはしない。凡ゆる星群を従へつゝ太陽は、地球に對し——その凡ゆる生物と其の子孫とを抱擁する地球に對して、此の叫びを投げかけて居るではないか。自然現象も、地球も、水も、空氣も、光線も、將た又熱も地球の凡ゆる形式に就て、此の叫びを交互に投げかけて居るではないか。一木一草の凡ゆる部分は、その後繼者として黙々裡に芽生へつゝある種子に就て、此の叫びを交互に投げかけて居るではないか。然り、凡ゆる森羅萬象に於て、苟も生命と活力との漲るところ、全般と總體に於て完全に自己の存在を

明かにせんが爲に、(例へば、一粒の梅檀の種子が一本の梅檀全體の性能を具備する様に、單一體並に有機的統一體を具備せんものと努力するところ——到るところに、吾人は「いざや來よ友よ、幼な兒と共に生き長らへん」といふ觀念が全生命に適應さるべき金言として、闡明してゐるのを見るのである。

仍でより高き意識を屈指して向上すべく運命づけられてゐる自覺せる人間は、相互の向上と認識との爲に、亦共通の職務とその達成との爲にも、自然が既に暗黙裡に生命の一般法則として、又不可欠の要求として闡明せるところの物を聲高らかに闡明すべきではなからうか。

故に此の訴へは、此の訴へに同情せんとする人々のみならず、亦行爲に於ても夫れに同意し呼應せんとする人々の耳朶にも容れられん事を望んで止まない。何となれば人は天分に於て他の凡ゆる生物に絶したる所謂萬物の靈長であり、隨つて幼兒は又草木の萌芽以上に卓越して居るではないか。梅檀の若芽が、夫れ自身の内に完全なる梅檀の性能を具ふるが如く、人間は夫れ自身の内に全人類の性能を具ふるものである。故に人類は一人々々の幼兒の内から新しく生れ出づるものではあるまいか。然るに誰が此の性能を突きとめて居るだらうか。誰が夫れを測り得て居るだらうか。夫れは神の御旨に委ねられてあるのではなからうか。

依是觀是、「いざ來よ友よ、幼な兒と共に生き長らへん」といふ訴へは、逝く年と來る年との分岐點に於て、中心點となつて一切を連結する眞生命の呼び聲である。隨つて此の訴へは凡ゆる生命と正しく融合するものであつて、換言すれば、人間と人生とは相互に、そして亦人類と結合し、又生物は森羅萬象と結合するのみならず、凡ゆる生命の源泉とも、亦「いざ人の姿を我と我が像に擬らへて創らなん」と宣ふた造物主なる神とも結合するものである。

故に「いざ來よ友よ、幼な兒と共に生き長らへん。」である。

實踐 窮行

凡そ生命の完全なる表現に對する眞の決心と純粹の努力との存する處、そこに直ちに實踐窮行あるを見ること、宛ら鮮明なる獨立の結合的思想が直ちに行動に訴へて於て意思表示せん事を求むる場合と一般である。いざ來よ友よ、幼な兒と共に生き長らへん」といふ人間性の根本的にして不滅なる思想は、それが行動に於て意思表示さるゝ時、家族や國民や又人類の一員としての人即ち幼兒の裡に活動、穿鑿、並びに修養に對する衝動を涵養する事に依つて、初めて家庭生活の涵養に對し、そして人生と國民と人類とに於ける陶冶に對する「制度」となるのである。換言すれば此の思想は、人類の獨學と獨修と自己修養との爲の「制度」たるに留らず、亦同一の一貫せる遊戯と獨創的自己活動と自發的獨學との普遍的にして、隨つて個性的なる訓練の爲の「制度」であり、就中、幼兒の哺育を目的とする家族と學校とに對する「制度」であり、又自己の修養に於て完璧と結合とを志して精進する各個人に對すると同様に、小學校や中學校に對する「制度」でもあるのであつて、要するに此の互惠的要望の精神が、獨逸、瑞西、乃至北米に於て多くの家庭を糾合せしめたる處の物を實行しやうといふのが其の目的である。

さて此の論文は、先づ第一に此の制度を説明し紹介するのが主眼であるから、有機的統一體の「根柢」の紹介から始めやう。抑々各個人の未來に互る全生涯の進展と形成とは、其の存在の出發點に含まれてゐる。即ち各個人の生活の遺憾なき實現と不滅の機能とは、全く出發點の理解と涵養と、認識と實行とに基いて居るのである。

人の幼年時代は、宛ら一木一草の花にも譬ふべきもので、夫れ等の花の一木一草に於ける關係と、幼兒の人類に於ける關係とは全く同じで、人生の若き蕾であり、新しき花なのである。剩へ幼兒は新しき人生の不斷の再現を促し約

束し、闡明するものである。

例へば樹の膏が、蔓や枝や幹と連絡し根や梢と連絡し、更に此の二つの部分を通じて天地と連絡して、其の存在の進化と繁榮との爲に全宇宙に對して結合的提携と互惠的交渉とを保つが如く、人も亦自然と人類と、そして凡ゆる靈的努力並に影響、即ち宇宙森羅萬象の生命と 全般的に進化する生活交渉を保つて居るのである。

完成を目標とする人間の多幸なる進化と、其の天命の達成と努力に依る人生の純粹なる歡喜並に眞の平和の獲得とは偏へに人が幼時に於てすらも、對外關係のみならず自分の性能に關する正確なる認識に基くものであり、又、此の性能と是等の對外關係とに對應する適當なる處置に基いて居るのである。

然るに人は被創造者である。しかも夫れ自體同時に一部分でもあり、そして一つの統一體でもある。故に、人は部分性統一體——Griedganzes——と謂つてもよい。何となれば、一面に於て創造物としての人は、宇宙森羅萬象の一部分であるが、亦他面に於て人は創造物であるが故に彼の創造者即ち神の性能——即ち生氣橫溢し存在を高唱する不滅の而も創造的性能が其の裡に潜在して、夫れ自體完全なる單一體であるからである。

人は斯くの如く夫れ自體生命であつて而も子孫にも生命を與ふるものであるから、此の創造的にして根本的なる性能は、創造的組織に對する人の衝動の裡に實在してゐるのである。此の根本的性能は、幼兒の内にすらも實在して居るものであつて、觀察から分析へ、そして再び結合を志す本能が是であり、換言すれば組織的にして創造的の活動に對する本能が是である。實際幼兒に於ける此の本能の涵養は、やがて人の生命を明白に表現せしめ、同時に其の生命の要求を完全に充足せしむるものである。

人は幼時に於て、父親親と母親とに依つて鍛練され感化さるるものゝ如くである。

父と母と、そして子と相俟つて、三位一體の有機的統一體、即ち家族を形成する。幼兒は其の誕生に依つて、家族並に家族生活を創造する。そして一方地上に於ける人の不斷の出現は、家族と不可分の因果關係を有する。即ち家族と子とは互惠的に條件づけるものであり、其の何れを缺いても存在するを得ないものであつて、是等は謂はゞ夫れ等自身に於て不可分の單一體を形成して居るのである。

然るに前述の如く、人は夫れ自身一體一つの有機的統一體でもあり同時に、亦家族といふ有機統一體の不可缺の一員でもあるから、人は宇宙への（こゝでは地球上に於ける謂）最初の誕生の場合と同じく、家族中への最初の誕生の場合に於ても所謂「部分的統一體」として改めて登場するものである。

人は、家族の一員としてのみ初めて相關的で、正銘の完全なる人となる事が可能であつて、換言すれば一箇の有機的統一體としての家族こそ、一箇の眞實完全なる人らしい存在であり、一箇の有機的統一體としての家族生活こそ、一箇の眞實完全なる人らしい生活なのである。

さて、家族が人の生産並に其の子孫の媒介者の根本的條件である如く、亦人は幼時に於て、家族と連繫し影響さるゝ時のみ創造的自動力に對する其の本能の進展を十二分に遂げる事が出来るものであつて、その時こそ人は、此の本能の翼を思ふさま伸して生活する事が出来るのである。即ち凡ゆる純粹の人間の教育も眞實の人間の訓練も、それから斯ういふ我々の努力も、悉く家族に於ける此の活動的の漸層的涵養と、此の本能の充足に對する幼兒の細心なる啓發と、此の本能に従つて活動すべき幼兒の適應性と密接な連繫があるのである。

實に人をして地上に於ける誕生の第一日より、一箇の完全なる人間として、夫れ自身一箇の有機的統一體として、又有機的生活體と協調提携しつゝ、自由にしかも自發的に自己を開發し教育する事を可能ならしむる事に、吾人の努

力の目的も在るのであつて——換言すれば、人をして自から鍛練し教育し、斯くて凡ゆる生物の確固たる一員なる事を自から認識し、夫れ自體自由に然かも自發的に自己の存在を明かにする事、即ち自由に然も自發的に生活する事を可能ならしむるのが、吾人の努力の目的なのである。

更に、愛即ち兩親と子の愛、換言すれば所謂肉親の愛の最初にして根本的なる形態は、今や家族生活の裡に發見されるが、實に家族こそは愛が個人的なる温室である。幼兒の創造的活動力に對する衝動を涵養し啓發する手段の中にこそ、又此の衝動を啓發する手段を補足する處にこそ兩親の愛は其の全幅の姿を表現するものである。此の衝動の涵養はやがて、兄弟姉妹の愛、即ち同胞の愛を呼び起して是を強化する。斯くて此の創造的活動力に對する衝動の涵養は、親子の眞實の愛、即ち純粹の肉親の愛の廣義に於ける現れであつて、是れはやがて至上の愛を啓示すると同時に、愛の性能を十二分に充足せしむるものである。

人を一箇の被創造者と考ふる一面、其の全生涯を通じてのみならず幼年時代に於てすら、一箇の創造者として彼を見做し待遇するのは缺くべからざる必要事であり、そして自から創造しつゝある間にも、既に幼時より創造主なる神と創造と、そして被創造者との關係を發見し、認識し、斯くて彼の日々が増大する收容能力に應じて、此の三位一體の因果關係を發見し認識する様に彼を訓練し涵養するのは缺くべからざる必要事である。斯くの如く訓練された曉に於て、人は一箇の地上の生物としての彼の天職と天命の何たるかを理解し認識して是を遂行する事が出来るであらう。即ち創造と創造物と隨つて人との裡に神の御姿を認め、自分自身並に人類の裡に自己の姿を認め、斯くて他人の裡に各自の個性を、各自の個生の裡に他人を區別するを知つて、此の認識を進めて夫れ表現し又は表現せしめ、夫れを會得し又は會得せしむる事が可能になるだらう。

然しながら、物を觀察し認識しそして會得する爲には、道知るべの光明を必要とし又前提としなければならぬ。故に人の創造力と觀察力とに對する衝動の十分なる涵養に依つて、認識は人間の裡にそして其の周圍に光明を現像する。斯くて、(他人の光明となり又は他人の光明の中を歩むべき)人の天命と天職とは、創造的活動力への衝動の涵養に依つて前述の天命を全うすべき可能性と共に、吾人に啓示されたのである。

斯くて吾人は、人が此の地上に初めて出現し、初めて家族に加入したる時より、既に夫れ自身が尙單一體であるといふ三次元の方法(即ち三位一體の方法)に依つて、即ち生と愛と光りとに依つて——換言すれば觀察と認識と會得と記憶とに依つて、人は行動するのを知つたが、亦同様に人の創造的活動力の衝動の細心なる涵養は、人間の此の三位一體の生活と完全に關聯し、そして其の生活を満足せしむるものであるのを知る。然るに人が據つて以て行動する所謂三位一體の方法なるものは、他に比類を見ざる程人間にとつて重大なるものである。何となれば、神は生命としては大自然の裡に、即ち宇宙森羅萬象の裡に、又愛としては人類の裡に(そして愛の裡に)將た又光明としては智力の裡に(即ち靈魂の裡に)夫れ夫れ身窮からの御姿を示顯し給ふからである。故に神は生であり、愛であり、そして光りである。即ち斯くの如き三位一體の方法に於て、神は造物主としての御姿を現し、又創造物の裡に御姿を現し給ふのである。依是觀是、人の子の實體と性能とは、生と愛と光りととの裡にその實在を確信され、又生と愛と光りとして、是れまで實現したる處と現に實現しつゝある處とを表現される。

即ち生に依つて幼兒は最も密接に大自然、即ち森羅萬象の一切と連絡し、愛に依つて幼兒は最も密接に人類と握手し、最後に光りに依つて幼兒は智、即ち神と共に在るものゝ如くである。

故に被創造者としての人は、地上に生を享けたる初期即ち幼時に於て、所謂三位一體の子として其の關係する凡ゆ

る方面に於て觀察され、考慮され、そして哺育さるべきである。或は三つの別箇にして離るべからざる關係に於ける幼兒として、即ち大自然の子として、人の子として、そして神の子として、換言すれば第一に其の平俗的、地上的にして自然的なる條件と關係、即ち其の生活に應じて、第二に彼の人間としての存在、即ち彼の愛に應じて、最後に彼の生得の靈的性能、豫感と感受性、記憶、認識、意志、學問と智識とに應じて、人は其の關係する凡ゆる方面に於て觀察され、考慮され、そして哺育さるべきである。其の第一の關係に於て（大自然の子として）人は束縛され拘束されて、無自覺で、衝動に盲從し、多感にして只管唯物的に生活する生物として考へらるべきである。最後の關係に於ては神の子として、即ち單に自覺に適應し、又自覺すべく約束されてゐるのみならず、亦既に自己の性能を自覺し豫想し、隨つて我と我が意志に依り、一箇の細心にして鋭敏、直覺的にして靈感的、然かも博識にして賢明なる生物として、高尚にして純粹なる生命の統一を招來する一箇の自由なる生物として、人は考へらるべきである。そして中間の關係に於ては（人類の子として）羈絆より自由へ、單獨より統一と自覺へ、分立より結合と平和へ、只管に精進する生物として、換言すれば上述の努力に日夜孜孜として倦むを知らざる生氣横溢せる生物として、そして統一の實現を待望しつゝ、歡喜に輝く生物として考へらるべきである。

依つて以て人が實在する凡ゆる條件と關係とを判然と自覺する事と、是等の條件と關係との要求を日夜忠實に遵奉する事とは、（一箇の存在としての）人をして初めて自覺に於ても行動に於ても人とならしめるのであつて、換言すれば、人をして己れの義務の細心にして然も愉快なる實行を遂げしむる事に依り、又人としての義務の總額を遲滯なく清算しむる事に依つて、一箇の完全無缺の人間たらしむるのである。

若し人の子が、其の創造的活動力の衝動の完全なる涵養に依り、其の性能の三位一體に於て、彼の生命の統一に於

て、即ち彼の環境と關係との凡ゆる方面に於て、かく理解されそして適切に取り扱はれさへしたならば、又若し彼が其の人と就り、天分、期待に應じて、一箇の地上の生物として理解されそして適切に取り扱はれさへしたならば、最後に若し彼が同様の三位一體に於ける彼の周圍の外界を認識し、隨つて同様の三位一體に於ける神の御姿を認識し、又、其の統一に於て、各自の個性に於て、そして凡ゆる統一の綜合體に於て、自己を取り捲く外界を認識しさへしたならば、幼兒は實在の自己として、即ち多數の結合せる（しかし夫れ自身に於ては單一體である）有機的統一體として、又同時に大なる有機的統一體——即ち凡ゆる生物の一員として、自からを啓發する事が出来る。換言すれば自己の天命に應じて自からを啓發し、そして自己の天職に忠實なるを得るのである。斯くて幼兒は、自己並に自己の周圍より、一箇の生命の完璧と統一とを形成し、そして彼の創造的生活に依つて、神と大自然と人類とが、統一と單一とに於て夫れ夫れの姿を現はすであらう。そして全般的結合と、純粹の平和と、生命の眞の歡喜との裡に、亦夫れを目的として神と大自然と人類とが幼兒に夫れ夫れの姿を示す如く、幼兒も亦自己の存在を彼等に明かにするだらう。

故に此の「制度」の目的は、人の性能並に人の組織と活動とに對する本能に基き、そして此の衝動の涵養に伴つて、一箇の不滅の有機體となる事であつて、謂はゞ、人が大自然と生命とに對する相對關係に基いて、職業選擇の手段、隨つて訓練と教育の手段を供給する一つの有機體となる事である。こゝに謂ふ手段とは、夫れが幼兒の精神的覺醒と、四肢並に感覺の使用との第一階梯より、そして其の體力並に智力の生長に伴ひ、極めて活潑に利用さるゝ時には、凡ゆる方面に於て、自己と大自然と人生の法則の三者と一致調和して、幼兒を啓發するものである。斯くて此の「制度」の目的とする處は、職業選擇の手段、並に涵養と教育の手段を確立するのにあつて、其の手段は、相互に關聯して涵養と教育の目的を示すと同時に、大自然と人との緊密なる連絡に依つて、其の目的を表現し、以て兩者の要求を充足せしむるものである。